

総務常任委員会視察研修報告書

- 1 期 日 令和元年11月11日(月)～13日(水)
- 2 視 察 先 (1) リコージャパン株式会社
リコー環境事業開発センター(静岡県市御殿場市駒門1丁目10)
(2) 袋井市
袋井市役所浅羽支所(静岡県袋井市浅名1028)
(3) 豊田市
豊田市中央図書館(愛知県豊田市西町1-200)
- 3 視察内容 (1) 企業におけるSDGsの取組について
(2) 命山整備、災害対策について
(3) あそべるとよたプロジェクトについて
- 4 参 加 者 古屋信二委員長、川畑孝治副委員長、山田栄委員、畑野麻美子委員、東野栄治委員、田中哲治委員、戸板進委員、近藤哲行委員、三宅小百合委員(9名)
- 5 随 行 者 森瀬明彦総合政策部次長、高橋奈美江議会事務局次長補佐

6 視察概要

- (1) 企業におけるSDGsの取り組みについて

リコージャパン株式会社概要

【事業内容】 デジタル複写機、プリンター、ネットワーク関連商品、消耗品の販売、及び機器保守、アフターフォロー

【売上】 664,315百万円(2019年3月期)

【従業員数】 18,240名 【拠点数】 354拠点(2019年4月1日現在)

※リコーと坂井市は包括連携協定を締結している。

【環境理念】

リコーグループは、目指すべき持続可能な社会の姿を、経済(Prosperity)、社会(People)、地球環境(Planet)の3つのPのバランスが保たれている社会「Three Ps Balance」として表し、目指すべき社会の実現に向け、「事業を通じた社会課題解決」「経営基盤の強化」「社会貢献」の3つの活動に取り組んでいる。2015年に国際社会で合意された「持続可能な開発目標(SDGs)」の達成に、事業を通じて課題解決に貢献できるSDGsの項目を17の中から8つに絞り込み、企業理念や事業戦略、環境経営の取組に紐づけて、SDGs達成に向けさまざまな取り組みを進めている。

【SDGsの取り組み】

(2015年9月国連で持続可能な開発目標 (SDGs) が採択される)

2016年7月CSR (企業の社会的責任) 報告書勉強会が始まる。

2017年4月CSR報告会勉強会でSDGsについて紹介、国内初のRE100への参加表明 (事業に必要なエネルギーを100%再生可能エネルギーで賄うこと目指す)

2018年3月役員・幹部SDGsバッジ配布完了、5月SDGs勉強会、10月SDGs強化月間、SDGsキーパーソン92名誕生、気候変動アクション日本サミットに登壇。

2019年4月SDGsキーパーソン105名で活動強化を図り、6月SDGs強化月間、「リコーグローバルSDGsアクション」を開催した。

- ・企業におけるSDGsの取り組みが利益を生み出し継続可能な取り組みであるか。企業理念、KPI (重要業績評価指標) に向けた具体的な取り組みについて調査した。

【リコー環境開発センター概要】

社外に向け魅せる拠点として年間約4,000人の来訪者を受け入れている施設である。エリアは、創エネルギー (木質バイオマス、マイクロ水力発電、室内光環境発電素子)、省エネルギー (照明・空調制御システムビル・工場設備 省・創・蓄エネ制御システム、次世代栽培システム)、省資源 (廃プラスチック油化)、リユース・リサイクルセンター、環境活動の展示エリアがあり、委員会ではコピー機のリユース・リサイクルの工程及び展示エリアを視察した。リユース・リサイクルエリアの概要はコピー機及び関連部品のリユース技術の実践・最適化を行っており、リユース製品工程 (回収→選別→分解→洗浄→組立→保証→梱包) リサイクル工程 (回収→選別→分解→抜取→分別) が見学できる。



リコージャパン(株)での視察の様子

(2) 命山整備、災害対策について

【袋井市の概要】

人口88,470人(9月末現在)、世帯数34,954世帯(9月末現在)、面積約108km²。静岡県西部に位置し、東は掛川市、西は磐田市に接する。静岡県「浜岡地域原子力災害広域避難計画」では袋井市の避難先1として三重県が、避難先2として坂井市を含む福井県が指定されている。

【命山建設に至る経緯】

1680年、江戸時代最大という台風が全国各地を襲い、袋井市では高潮が押し寄せ多くの人が死亡した。それにより、浜辺の村々に命山が造られた。

平成の命山は、東日本大震災における津波発生による甚大な被害の状況を目の当たりにした浅羽南地区で「津波から命を守る幸浦プロジェクト」が立ち上がり、市と協同で整備事業を計画した。またこのプロジェクトを受け、津波避難計画を策定し、小学校などの公共施設をはじめ、工場、事務所などの民間事業者とも連携して避難場所の整備を行うとともに既存の施設では一時避難が難しい地域に命山4カ所を整備した。

【命山概要】

- ・ 湊東地区命山「湊命山」 平成25年12月完成
敷地面積：6,433平方メートル、収容人数：1,300人
収容スペース：1,300平方メートル
地上高：7.2メートル（海拔10メートル）
- ・ 中新田地区命山「きぼうの丘」 平成28年3月完成
敷地面積：8,716平方メートル、収容人数：400人
収容スペース：400平方メートル
地上高：7.5メートル（海拔10メートル）
- ・ 湊西地区命山「江川の丘」 平成29年2月完成
敷地面積：5,968平方メートル、収容人数：300人
収容スペース：300平方メートル
地上高：8.1メートル（海拔10メートル）
- ・ 東同笠・大野地区命山「寄木の丘」 平成29年3月完成
敷地面積：7,859平方メートル、収容人数：300人
収容スペース：300平方メートル
地上高：7.5メートル（海拔10メートル）



人工高台「平成の命山」

(3) あそべるとよたプロジェクトについて

【豊田市の概要】

人口 426,142 人(9 月末現在)、世帯数 183,034 世帯(9 月末現在)、面積約 918 km²。愛知県のほぼ中央に位置し、県全体の 17.8%を占める広大な面積を持つ。クルマのまちとして製造業で働く人の 85%が自動車関連産業に従事している。1950 年拳母町が市制施行し拳母市が誕生。1959 年、自動車産業とともに発展することを誓って市名を豊田市に変更した。

【事業概要】

中心市街地活性化基本計画及び都心環境計画のなかで、名鉄豊田市駅周辺のまちなか広場を人の活動の場やくつろぎの場として開放し、市民・企業・行政が一体となってアイデアを出し合い、みんなの「やってみたい」を実現する「あそべるとよたプロジェクト」を実施。歩行者専用道路の一部を広場化し、日常的な休憩。飲食スペースの設置やイベント等の広場活用を可能とするなど、官民が管理する 7 か所のまちなか広場に賑わいを創出し、まちの回遊性向上を図るとともに、豊田の魅力を伝え、豊田に愛着を持てる場所として使いこなしていく取り組みである。

2015 年実験的に、すわれるデッキ WEEK・あそべるとよた DAYS を開催。(9 つの広場を 1 か月、31 団体、30 件の利用があった) 2016 年長期飲食事業(9 つの広場で 5 か月、38 団体、58 件の利用があった) 2017 年長期飲食事業・あそべるとよた DAYS を開催。(6 つの広場で 8 か月、53 団体、130 件の利用があった) 2018 年以降は 7 つの広場を通年で活用できるようにした。市民・企業・行政が一体となってアイデアを出し合い「やってみたい」ことを実施しながら試行を重ね、まちなか広場がより使いやすく生まれ変わるための継続的な仕組みをつくっている。

○あそべるとよたプロジェクト

平成 28 年 4 月あそべるとよた推進協議会設立。

○ペDESTリアンデッキ広場の開設・活用

名鉄豊田市駅西口の市道の一部を道路区域から除外する変更手続きを行い、イベント等の開催が可能な広場を平成 29 年 9 月に開設。ビアガーデン、サッカー観戦や祭り等のイベント誘致も行われ賑わいを創出している。

○あそべるとよた DAYS の開催

2015、2016、2017 年の試行後、通年で広場が利用できるようにした。窓口は、あそべるとよた推進協議会が一括して行う。平成 29 年公共空間ガイドライン案による試行取組を実施。平成 30 年以降は、公共空間ガイドラインを作成。

まちなか広場利用はチラシ、ホームページで募集している。



豊田市駅周辺「まちなか広場」

7 所見・感想等

○古屋信二 委員長

・企業におけるSDGsの取り組みについて

行政施策は持続可能な社会づくりそのものであることからある町職員とワークショップを通じて課題解決に向けた施策を考え、それを実行するまでの計画づくり等に成果があったという。また、京都市では大学・企業と連携する産学公の連携により持続可能な魅力あふれた街づくりを実践しリコーもプロジェクトに参画しているとのこと。持続可能な自治体運営には今後、民間企業の必要性を感じました。

・命山整備、災害対策について

袋井市でまず特筆すべきことは人口増加率(1.1%)・出生率・生産年齢人口(62.2%)・経営耕地面積(308.4a)が県内1位で働き盛りの人が多い活力がある都市である。

江戸時代に高潮から身を守るための人口の築山であった命山が今も袋井市に残っていて平成23年の東日本大震災以降、袋井市において津波から市民を守るための避難施設の必要性から先人の知恵に学び現代工法による命山建設に至った。

当市三国東部地区においては津波による浸水や河川氾濫の危険性が拭いきれないことからこの事例を参考に議論が必要かと思われました。

・あそべるとよたプロジェクトについて

名鉄豊田市駅周辺のまちなか広場を人の活動やくつろぎの場として開放し、市民・企業・行政が一体となってアイデアを出し合い、みんなの「やってみたい」ことを実現する「あそべるとよたプロジェクト」を実施。歩行者専用道路の一部を広場化し、日常的な休憩・飲食スペースの設置やイベント等の広場利用を可能とするなど、官民が管理する9箇所のみちなか広場に賑わいを創出し、まちの回遊性向上を図っている。

このプロジェクトは都市環境計画の施策の一つであり空間活用の施策・空間再整備の施策など大規模な事業を進めていることは財政が豊かである。当市において、大規模事業は無理でも賑わいを創出する広場の観点では施工中の丸岡バスターミナル広場は良い題材

になると思う。広場活用に官民のアイデアを期待したい。

○川畑孝治 副委員長

・リコー環境事業開発センター

当事業所のSDGsに向けては、昨年ビックサイトで行われた、エコプロ 2018 に出展されており取り組みの一部を聞いていた、建物の中には間伐材を利用した壁板、漁網を利用したカーペット、コピー機のガラスなど、リサイクルされた物が使われていた。

エネルギーに関して、省力化に向けた省エネ、新たに作る創エネ、作ったエネルギーを貯める蓄エネに取り組んでおり、地球温暖化に対する取り組みで他の企業や各種団体での取り組みを期待したい。

社会課題の解決に向けた事業の取り組みが、企業としての経営基盤の強化や社会貢献につながる仕組みをわかりやすく説明を受けた。

実際にコピー機のリユースについて工場見学をしたが、カメラやAI・ロボットなど先端技術を取り入れ効率的な工場であった。

また、坂井市と包括連携協定を提携しており、丸岡地区の下久米田において地域団体と森林整備などが行われていることも紹介され、今後の活動・取り組みに期待したい。

・袋井市命山整備と災害対策

まず、浅羽支所にて袋井市の災害対策について説明を受けた、自主防災組織については100%の組織率との事で驚いた、また防災訓練については67,8%もの人が何らかの訓練に参加しているとの事で、市民の意識の高さを感じた。

また、袋井市においても防災無線が効きにくい等の課題があったが、市民に対し情報を待つ受け身から積極的に情報を取りに行く事を進めていたが、この点に関しては坂井市民に対しても周知していくべきと感じた。

袋井市が太平洋側に立地していることから、南海トラフ巨大地震により、津波被害が想定されることから、海岸全域(5.35Km)の防潮堤整備がされていた、計画では従来の2段式堤防を市が標高10mに整備しその上に県が標高12mに整備するもので、令和10年度の完成を目指し現在市事業74%県事業54%の進捗率であった。

袋井市においては江戸時代から人口の築山(命山)があったそうだが、東日本大震災以降国の補助を受け海拔10mの地点に地上7.2m~8.1mの命山が市内4か所に整備が行われていた。

命山に関しては公助として市が整備し、自助として地域がトイレや草刈りなど維持管理を行っていたのは良い取り組みと思った。

命山山頂にはベンチの中に、食糧、簡易トイレ、保温シートなどが密閉保管されておりコインにて開けることが出来るようになっていた、この災害に対応したベンチは坂井市内にも設置できると良いと感じた。

・あそべるとよたプロジェクト

愛知環状鉄道 新豊田駅と名鉄豊田線 豊田市駅間やその周辺にある開けた空間を”まちなかの広場”を、”人”の活動やくつろぎの広場として開放して色々な取り組みをしてい

た。

特に駅間の空中回廊において、人の通行に支障の無い部分を道路区域から除外しベデストリアンデッキとして開放し、長期飲食事業として無料で貸し付けを行っていた。

また、市民の発想により音楽ライブや、ダンスイベント、豊田フェスティバルなどが行われており市民の広場として活用されていた。

今後の計画では、これまでの広場の利活用を踏まえ、空中回廊の架け替えが予定されているのと、豊田市駅前の道路も広場として使えるように整備したいとの事で、今後の取り組みや整備後の広場の活用についても楽しみである。

現在、丸岡バスターミナルの整備がされるが、市民が参加しやすく市民に親しまれる丸岡バスターミナルになるために参考にしたい。

○山田栄 委員

- ・企業におけるSDGsの取り組みについて

リコー全体がSDGsの取り組みを2015年以前よりお客様と共に環境経営を実施しており、特にコピー機等レンタル・リース事業として活用されており、リユースには最適化と考える。

また実践している工場も識別管理されており、工場内の物流もAI管理で非常にSDGsに取り組まれている。

- ・命山整備、災害対策について

東北地震、津波対策を参考に袋井市は先人の言い伝え等をしっかりと守り、それを確実に実践しており非常に参考になった。

- ・あそべるとよたプロジェクトについて

トヨタを中心とした企業町であり（S60年～H28年）30年間かけての町づくりを継続的に実践しており、更に都心環境計画の作成も（2016年～2027年）リニア新幹線開業に合わせており、プラン内容が車中心の町であるのに中心道路を幅広い歩道にするなど画期的である。

○畑野麻美子 委員

- ・企業におけるSDGsの取り組みについて

はじめに、「下久米田リコー協働の森」で、地域里山の理解などの具体的な活動を「リコージャパン福井支社、リコー福井事業所」と「坂井市、下久米田保全会」と「お客様、坂井市住民」との協働は、SDGsの11「住み続けられるまちづくりを」 13「気候変動に具体的な対策を」 15「陸の豊かさを守ろう」 17「パートナーシップで目標を達成しよう」 4「質の高い教育をみんなに」について取り組んだ紹介があった。

まさに、自治体と連携した取り組みである。

* 中学受験にもSDGsの出題があり、SDGs視点のはじめての問題は

問 あなたが「かけがえのない」存在として
大切にされた体験をあげなさい。
そして、その体験があなたの生き方に
どのようにいかされているかを書きなさい。

この問題は未来への力を育てるとともに、自分も相手も大切にすることにつながり、いじめもなくなっていくのではないか。

例として、福井花子さんは「授業参観で、好きな色は何との質問に
ほとんどの子はピンクと赤と答えたが、私は紫と答えた。家に帰ったら、お母さんが、
花子、あなたの発言は素晴らしかったと言ってくれた。私という人間を認めてくれた」と
回答。

*オフィスから社会問題解決へ

I C Tで学校を守り、地域の未来を築いていく

全国的に小学校の統廃合や複式学級は社会問題であり、リコーUCS がつなぐことで、先生と子どもたちが一緒に写り、まるで、そこで同じ空間を共有しているようであり、学習に取り組んでいるかのようであった。

統廃合をしても、遠い距離を長時間かけて通学することなく学べるという、これからの在り方かなとも思った。

愛媛県では 2015 年より遠隔行動授業を取り入れているとのこと。興味深い。

*つくる責任

つかう責任

リコーとして、再エネ活用目標は使用電力を 2050 年目で 100%、2030 年までに少なくとも 30%再生可能エネルギーで賄う、という事である。

全国から集まってきた古いコピー機のリサイクルは、全部品を解体し、組み立てるのであるが、そのことによって、どのくらいCO₂削減と省エネにつながられていくかもしっかりと表示され、循環型社会にしっかりと取り組んでいる。

今後、コピー機購入はリサイクル製品にしよう。

社内

社内も工夫されている。階段には、エレベーターを使わず、階段を使用した場合のCO₂削減と省エネの数字が表示されていた、分かりやすく、階段を使おうという意識になる。

また、照明などLED70%、20%、白熱球の3段階になるよう設置されていて、窓際などカーテンを開ければ、外の明かりを感知し、LEDの照明が白熱球に変わるという省エネの工夫があった。

また、会議室なども人が入ると動きに合わせて電気がついていく。

などなど、新しくなる坂井市の庁舎にぜひ導入してほしい。

リコーは、5つの重要課題が8つのSDGsに取り組むこととなっている。

創業者の言葉も、うなずける。

人を愛し、国を愛し、勤めを愛す

「SDGs は私たちが受け継いできた三愛精神の理念と根底を同じくするものであると感じている」

リコーとSDGs はいま、特別のものではない。坂井市もSDGs だからと特別ではなく、それを手掛かりに、今までの取り組みをより、住民主体・誰一人取り残さないと深めてほしい。

・命山整備、災害対策について

防潮堤は財産を守る 命山は命を守る

東日本大震災後、先人の知恵に学んだという「平成の命山」建設。江戸時代につくったと言われる「命山」が今も残っている。

日々、生活している場にその「命山」は見える。その教訓をいかして「平成の命山」もまちなかにあり命山の高台にある東屋には、長椅子が3個置かれている。その椅子のふたは10円玉であげられ、中には非常食や簡易トイレなどの災害時の需品が備えられている。

日頃は、住民の散歩コースや子どもたちの遊び場としても自由に使われており、災害発生時には迷うことなく、命山を目指していくことにもなるのではないだろうか。

幼稚園、保育所、小学校の津波避難合同訓練での課題をふまえての津波避難タワー建設も、未来を担う子どもたちの命を守るという願いから整備されており、命を守ることを優先。

これ一冊あれば・・・「防災ガイドブック」は、地震編、津波編、液状化編、洪水編、避難編と大変見やすく、わかりやすくまとめている。

この一冊は坂井市にも、作ってほしいものである。

「耐震補強工事」や「防災ベット」「耐震シェルター」「家具固定」や「ブロック塀の撤去や改修」など一部補助される。きめ細かな補助の必要性を感じた。

また、断水トイレシートの注文用紙を住民に配布するなど積極的な取り組みが見られる。

自治会の自主防災組織率は100%で、防災訓練をする2ヶ月まえに、自主防災隊を集めて協議をする。

会議の中で、市役所から提示した訓練メニューをこなすこととは別に、自主防災隊が自らの地区の課題を考え、その課題解決の共通認識をするための取り組みを進めることを促している。

例えば、夜間や、車いす、酸素ボンベを使った場合など、ある地域では車いすでの避難訓練で、津波が来る時間は発令から25分で、18分以内に避難完了しないといけないのが、車いすだと21分かかったという体験をした。地区での課題解決の訓練は大切である。

防災無線が聞きにくいという点では、デジタル個人受信機（8～9万）を貸し出している。

また、要介護者の施設には渡している。高齢者への対応は課題であり、携帯やメローネ

つと登録、テレビDボタンなどとしている現状。

坂井市においても、無線の聞きにくさ、高齢者への対応は重要な課題である。

・あそべるとよたプロジェクトについて

まちなか広場として、人が集まる広場での「あそべるとよたDAYS」はその期間中は広場の利用料は、通常の利用料金とは安くなり、カフェバーやイベントなどが催される。

とよたDAYSは、事務局は行政（商業観光課）であっても、7つの広場を一つの窓口で受け付け、管理者も民間であり、使用料の徴収分は管理者に渡し、広場全体の管理をしてもらうなど、「とよた」ならではの取り組みである。

歩道や道路を広場としてしまうなどの取り組みは、どんどん枠組みを外していつている。駅周辺の広場は無料で貸し出し、移動用のカフェバーなどは個人が用意すればよいとなっている。カフェバーは約300万円でできたとのことである。それでも、やはり人口の多い豊田市だからできるものでもある。

現在丸岡バスターミナル整備中であるが、来年3月には完成する。まちなか広場としての活用方法、また近くの公園とのマッチングなども考えていく必要がある。

まちなか広場推進準備会、街中広場推進協議会をつくるなどの取り組みもそろそろ必要では。

丸岡バスターミナルまちなか広場としての仕掛けづくりに着手し、遊べる、くつろげる、食べられる空間などとして活用していきたいものである。

○東野栄治 委員

・企業におけるSDGsの取り組みについて

リコーグループは「事業を通じた社会課題の解決」を経営の根幹に据えており、SDGsの項目を17の中から8つに絞り込み、取り組みを進めている。まず、リコーのマテリアリティ(重要課題)として5つの重要課題(生産性の向上、知の創造、生活の質の向上、脱炭素社会の実現、循環型社会の実現)を設定している。創業者が掲げた「人を愛し、国を愛し、勤めを愛す」の三愛精神の理念とSDGsを根底を同じくするものと捉え、営利目的ではなく、事業を通して世の中にサービスをするという精神で取り組みを進めていることが特徴で素晴らしい取り組みであると感じた。

・命山整備、災害対策について

袋井市は江戸時代に高潮から身を守るため、人工の築山であった「命山」が今も大野地区・中田地区に残っていて、平成23年に発生した「東北地方太平洋沖地震」以降、「平成の命山」建設の声が地元住民より上がり、現在、4つの命山ときらりんタワー(津波避難タワー)が建設されている。東海・南海地震(レベル1)、南海トラフ地震(レベル2)を想定した災害対策は、市民に危機意識を喚起し、本物の災害対策の意気込みを感じた。坂井市も更なるい危機意識を画期する災害対策が必要である。

・あそべるとよたプロジェクトについて

本事業の概要は①ペDESTリアンデッキ広場(収益事業型による広場活用)②あそべるとよたDAYS(統一窓口・ルールによる広場活用)である。両事業とも、まちなかに訪れた人がくつろぎ・憩いの場、人々の出会いの場となるとともに、市民・企業の活用の場となることを目指していて、官民共同の豊田駅周辺の賑わい創出事業として、試行錯誤を重ねながら成果を上げている。

○田中哲治 委員

・企業におけるSDGsの取り組みについて

リコーグループは、社会に広く目を向け、社会課題解決にチャレンジし、新しい市場や提供価値を生み出し、社会の発展と成長の同時実現をつなげていく考えである。

そして、「事業を通じた社会課題の解決」を経営の根幹に捉え、SDGs達成に向け、事業を通じた課題解決に貢献できるSDGsの17項目から8項目に設定し、企業理念や事業戦略等に取り組み、SDGs達成に向けた様々な取り組みを進めている。

国内自治体で、SDGsに関する取り組み着手・検討している自治体は243自治体(14%)で、応募しない理由として「提案できそうなモデル事業が見当たらない。メリットを感じなかった。」などがあり、県内でも2市が取り組んでいるようだが、本市でも取り組むのであれば、職員向けの勉強会や研修会、更には企業等への普及啓発情報発信が大事と考え、慎重に対応すべきと感じた。

なお、リコー環境開発センターでは、コピー機のリユース・リサイクルの工程等では、コピー機や関連部品のリユース技術の実践・最適化を行っているとのことである。

・命山整備、災害対策について

袋井市の9月末現在の人口は88,470人、世帯数は34,954世帯で、「浜岡地域原子力災害広域避難計画」では袋井市の避難先1として三重県、避難先2として坂井市を含む福井県が指定されている。

また、江戸時代に高潮から身を守るための人工の築山であった「命山」が、今も市内に残っている。

「平成の命山」の建設は、東日本大震災における津波発生による甚大な被害の状況を目の当たりにし、地域の皆さまの命を守るべく、浅羽南地区において立ち上げられた「津波から命を守る幸浦プロジェクト」と、市が協同で整備事業を計画した。

「平成の命山」は、4地区に海拔10m(高さは約7m~8m)の場所に整備され、4ヶ所の整備費は約13億3,300万円(うち、国の防災安定基金で2分の1、県で3分の1の補助あり)で、土地については、パチンコ店跡地や田畑を買収した。

また、地域防災情報の入手は、「メローねっと(袋井市メール配信サービス)」を利用している。

また、家具固定の補助制度では、転倒防止器具を1世帯6台分までを現物給付し、1台あたりの器具代として市が2,000円まで負担、2,000円を超える分は申請者負担となる。なお、災害時に自力で避難できない方がいる世帯は、2台から6台までの取り付け費用は市が全額負担。(年間に、約20件申請あり)

坂井市においても、今後、海底を震源とする地震が発生した場合、津波による被害が発生する可能性があると考えられ、とにかく高い場所へ逃げるのが大事。そして、食料・飲料水・非常時用品を常日頃から準備しておくことが、改めて強く感じた。

また、坂井市の防災無線について、「音が煩い・聞こえない」の苦情があるが、スマートフォンや携帯電話への防災情報メール登録をさらに積極的に取り組むことが必要と感じた。

・あそべるとよたプロジェクトについて

豊田市の9月末現在の人口は426,142人、世帯数は183,034世帯で、「クルマのまち」として、製造業で働く人の約85%が自動車関連産業に従事している。

今回の「あそべるとよたプロジェクト」は、中心市街地活性化基本計画、都心環境計画のなかで、名鉄豊田駅周辺のまちなか広場を人の活動の場やくつろぎの場として開放し、市民・企業・行政が一体となってアイデアを出し合って実施した。

特に、「ペDESTリアンデッキ広場」では、長期飲食事業を行い、事業性成立の確認及び休憩・飲食機能を伴う質の高い空間づくりを目指していた。成果として、活用主体の発掘やマネジメント側に求められるスキルや作業量が明確になった。豊田市内外への活動発信できたなどである。課題としては、公民の管理する広場の窓口が統一化されていない。運営体制、継続方法が確立されていないなどが挙げられる。

収支について、収入面では、繰越金90万円・市負担金260万円・広場使用料110万円等で、約460万円収入、支出面では、コンテナ賃借料年間（リース）50万円・広場使用料等30万円・広告宣伝費備品で200万円・雑費等で15万円～20万円、約300万円の支出である。収支差引額の、約160万円を市へ返金する。（総工費は約500万円）

坂井市においても、現在「丸岡バスターミナル周辺整備事業」を行っているが、テナント出店も概ね決定したようであり、市内外の方をどう引き付けるかを十分な調査研究と、研修会等を重ね、まちなか広場の特徴・ルール・利用条件等も含め、利用者が積極的に利用できるあるいは利用しやすい環境を整えていただきたい。

○戸板進 委員

・リコー環境事業開発センター（企業によるSDGsの取組について）

リコーでは、SDGs17の目標のうち8つの事業に取り組み、特に重点的に取り組んでいるのが、7エネルギーをみんなにそしてクリーンに・12つくる責任、つかう責任・13気候変動に具体的な対策を、の3事業のようであった。

このきっかけは、2015年COP21で「パリ協定」が、国際サミットでは「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択され、世界は脱炭素社会の実現に向けて大きく前進したことによりことによりリコーも環境への取り組みが新しい段階に入り、リコー環境開発センターオープンがその象徴のようである。また、同センターはこれまでの3Rの機能を集約し、回収した使用済みコピー機を再生処理し、新製造と同等の品質基準を満たした再生機として提供する中心的な拠点となったようである。

さらに、事業に必要な電力を100%再生エネルギーで調達する目標を掲げるグローバルな枠組み「RE100」に日本企業として初めて加盟したことも、脱炭素社会に向けての

取組であり、環境負荷の少ない複合機の組み立てであり、再生エネルギー活用に向けた気運を醸成し、地域社会とともに、脱炭素社会に貢献するというもののように、下久米田地係で展開する、下久米リコー協働の森もその一つではないだろうか。

SDGsを達成するには、現在世界中において問題されていることを一つひとつ解決することであり、特に特別な事業を展開するものではないと考える。

坂井市においても、第2次総合計画目標項目達成が、SDGsの達成であり、今後の事業展開におおいに期待するものである。

・静岡県袋井市（命山整備・災害対策について）

袋井市では、東日本大震災における津波災害の状況や、今後予想される南海トラフ地震による津波から命を守るため、「津波から命を守る幸浦プロジェクト」による地域と市が共同で対策を行った結果、一時避難が難しい湊西地区に命山3カ所、津波タワー1カ所を設置したわけである。

この命山の管理は全て地域が管理（トイレを含む）すること、また頂上には非常用備品を備えたベンチがあるが、通常の非常用備蓄用品の他に、地域が必要とする備品が備蓄されていることも特徴であると思われる。

この他、民間の屋上も一時避難場所として活用するために、屋上への屋外階段設置に対し、補助金を出すとのことであったが、これも特徴的なものと感じた。

また、防災対策については、地震編、津波編、液状化編、洪水編、避難編とあらゆる災害を想定した防災ガイドが作成されていることに対し、坂井市では、わがまち便利帳に洪水、土砂ハザードマップが若干掲載されていることから、防災に対する認識の薄さを痛感した。

この他、自主防災組織率100%、家の耐震化率93%、市の避難訓練が年間2回実施されるのに合わせ、地域独自の避難訓練の実施、要介護者への個別受信機の貸し出し、防災メール登録の出前講座など坂井市においても大いに参考にしてほしいものであった。そして最後に、災害が発生した場合市では、緊急速報メール、防災行政無線、ホームページなどで情報を流すが、自らが情報を聞く、見る、確認することを市民に認識してもらうことが一番大事であるとのことであった。まさにその通りである。

・愛知県豊田市（あそべるとよたプロジェクトについて）

豊田市では、あそべるとよたプロジェクトとして、名鉄豊田線豊田市駅周辺にある開けた空間を『まちなかの広場』として、人の活動やくつろぎの場として7つの広場を開放し、さらには豊田に愛着を持てる場として、使いこなしていく取組を2015年から始めている。

この広場は、公共用地や民間の空き地を市民、企業、行政が一体となって取組んでいるプロジェクトである。

特に、愛知環状線新豊田駅と名鉄豊田線豊田市駅を結ぶ歩道橋の一部をペストリアンデッキとして市道の一部を広場として、使用しているところが特徴の一つと言える。

豊田市では、この区間を昭和60年から再開発に取組み、新豊田駅と豊田市駅を空中で結ぶ歩道橋や再開発ビルなどの整備が進められ、その後このプロジェクトが始まったようである。

今後は歩道橋も老朽化してきたとのことで、バス停の移動や歩道橋の付け替えなど事業

を進めていくとのことであった。その計画の中には、現在の車道を歩道に変更する案もあるようでスケールの大きさに驚くばかりであった。

平成 20 年 4 月に作成された、坂井市都市計画マスタープランでは、旧 4 町をコンパクトシティとし、ネットワークで繋ぐ計画のようだが、本庁舎整備が進む中、中心市街地とした整備を豊田市のように、30 年、50 年先を見据え進めることが必要ではないかと考える。

○近藤哲行 委員

・リコージャパン株式会社

この起業はSDGsを持続可能な開発目標としている。2030年までの17の目的と169のターゲットで構成する。

リコーグループはオフィス→現場→社会のSDGsの役に立てるものづくりを始めている。既にこの会社の床板はプラごみで、横板は竹で、立板は木の不用品で構成されていた。

具体的な活動は地域の里山の山、竹林整理伐、下草刈り、散策道づくり、植生調査、生き物調査、ワークショップなど、今後北陸も検討している。

工場見学では、5年前のコピー機を再利用し、部品などを交換してまた市場に出す作業コンピュータで大量のコピー機を移動する素晴らしいシステムには感動した。

・袋井市

袋井氏は東日本大震災を教訓に「津波の怖さと備え」を次世代にも語り継ぎ、そして避難場所「命山」をいち早く平成 23 年から取り組んでいる。

海岸線には標高 12m の防潮堤を設置し、その後方 200m には 4 つの命山と 1 つの防災タワーを作成している。

収容人数は約 2,570 人、人口約 9 万人にたいしては少ないように思えるが、市は地震発生後津波到着時間は 30 分後と想定しているなか、海岸付近で逃げ遅れた人のためにつくられたものと思われる。

その他、耐震のための補助制度を多種設けている。

坂井市も福井地震から 71 年経過しているなか、そろそろ防災対策として、海、川辺の防災対策を早急に取り組むべきと考える。

・都心環境計画「あそべるとよたプロジェクト」

豊田市は駅を中心としたまちづくりを行っている。このまちづくりは固執しないやり方で、道路を歩道に、歩道を休憩場所やコンテナを利用したテナントにしており、テナントは期間限定で貸している。いろんな変化を与えているのは面白い取り組みである。

行政が主体となっているのも珍しいと感じた。説明をしていただいた職員はとても若く、その方々の発想ではないかと思う。

坂井市のまちづくりにはとても難しいと思った。強いて言えば丸岡バスターミナル付近かと思った。

○三宅小百合 委員

・企業におけるSDGsの取り組みについて

リコーグループは、創業者・市村清による「人を愛し、国を愛し、勤めを愛す」という創業の精神のもと「世の中の役に立つ新しい価値を生み出し、提供しつづけることで、人々の生活の質の向上と持続可能な社会づくりに積極的に貢献する」を使命としている。その理念と2015年に国連で採択されたSDGsが合致していることをふまえ、持続可能な社会をビジネスの力で解決することを目指している。またSDGsに貢献しない事業は淘汰されるとの意識で、環境配慮や働きがい・経済成長、経営品質向上に取り組んでいる。社内での取り組みは2016年に始まり2019年には社内SDGsキーパーソンが100名を越え、6月にSDGsグローバルアクション月間を開催している。国内トップの取り組みのリコーと坂井市が包括協定を結んでいることから、今後リコーから講師をお招きし、市民の方々と共に学びたい。

・命山整備、災害対策について

中新田地区命山「きぼうの丘」を視察した。海拔10メートルの丘から海岸を見ると、海岸に高さ12m、長さ5.35kmの防潮堤が太田川から弁財天川まで築かれている様子が見え、袋井市の住民を守る危機管理意識の高さに感銘を受けた。また南西下方に江戸時代に築かれた中新田命山を見ることができた。

常に地震への脅威に取り組む静岡県。袋井市は命山という先人の知恵を現代の技術で再現することで海拔の低い土地の住民を守っている。

また人命被害ゼロを目指している袋井市防災ガイドブックは、地震・津波・液状化・洪水・避難に区分され大変参考になった。人命被害ゼロを目指した取り組みとして、①防災情報の利用促進「メローねっと」（登録の手伝いをする）、②耐震工事の補助（耐震診断は無料）、③防災ベッド・耐震シェルターの導入補助、④家具固定の補助制度、⑤ブロック塀改善補助等がある。現在、袋井市の住宅耐震化率は92%となっており、令和2年までに95%を目指す。東日本大震災を教訓にした東南海地震に備えた取り組みが大いに参考になった。

・あそべるとよたプロジェクトについて

中心市街地活性化基本計画及び都心環境計画のなか、行政主導で市道の一部を道路区域から除外する変更手続きが行われたことでペDESTリアンデッキ広場が開設できた。その後、実証実験的に試行を重ね、誰でも使える広場が整備され、市民が自由に使える広場が7~9カ所整備された。

現在の課題は、行政主導から民間主導への転換とすることである。また名鉄豊田市駅前では毎年10月に行われる拳母祭りでは、紙吹雪を舞わせながら8台の山車巡行が行われている。そのうち5台が駅前を巡行することから陸橋が高く設置されている。地域の伝統文化をまちづくりに生かしており、市民の幸福度や文化度の充実を感じた。さらなる発展に期待ができる。